平成２９年度経済建設常任委員会管外行政視察報告書

1　視察日時　　平成 29 年 10 月 18 日(水)～10 月 20 日(金) の 3 日間

【1 日目】下関市

10 月 18 日(水)　午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分の 2 時間

【2 日目】久留米市

10 月 19 日(木)　午前 10 時 00 分～午前 11 時 20 分の 1 時間 20 分

午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分の 2 時間

【3 日目】唐津市

10 月 20 日(金)　午前 10 時 00 分～午前 11 時 30 分の 1 時間 30 分

2　視 察 先　　下関市議会・道の駅くるめ・久留米市議会・唐津市議会

3　視察事項　　(1) ジビエの有効活用推進事業について【山口県下関市】

(2) 道の駅くるめ・まち旅博覧会事業について【福岡県久留米市】

(3) 唐津コスメティック構想・唐津焼産業振興について【佐賀県唐津市】

4　視察目的　　山口県下関市

農林作物などの被害を軽減するため、捕獲したイノシシやシカをジビエ肉（捕獲された野生鳥獣の肉）として有効に活用することを目的として建設された「みのりの丘ジビエセンター」の役割、設置に至った経緯等を視察することにより、本市での有害鳥獣対策を進めることを目的とする。

福岡県久留米市

・道の駅くるめ

昔から農業が盛んであり、福岡県でも最大の農業生産都市である久留米市の道の駅を視察することにより、本市の道の駅の振興に繋げることを的とする。

・まち旅博覧会事業について

久留米市では、観光客が約 80 項目ある観光プログラムから自ら関心のあるものを選び、訪問するという着地型観光を展開しており、市内外から多くの観光客が訪れている。本市の観光事業について、先進的取組を調査・研究することを目的とする。

佐賀県唐津市

唐津市では、コスメティック分野において、企業と地元大学、市で産学官の連携を行っており、コスメ製品の開発、販路拡大、企業誘致活動を展開しており、その手法等の先進的取組を調査・研究することを目的とする。

また、地場産業である唐津焼の販路拡大活動等を学び、地場産業の振興手法を学ぶことを目的とする。

5 参 加 者　《経済建設常任委員会》(5名)

副委員長　柏　原　　要
委　員　楠　　明　廣
委　員　高　岸　博　之
委　員　松　下　信　一　郎
委　員　赤　木　和　雄
《随行》議会事務局主査　宮　本　義　之

6 視察先出席者

【下関市】	下関市議会事務局局長	田邨　昇
	下関市議会事務局議事課主任	三浦　大二郎
	下関市農林整備課課長補佐 （兼）有害鳥獣対策室室長	髙田　潤一郎
【久留米市】	久留米市議会事務局議事調査課課長	本松　寿史
	久留米市議会事務局議事調査課 調査チームリーダー主査	志岐　明洋
	久留米市商工観光労働部観光・国際課課長補佐	水落　留美子
	久留米市農政部みどりの里づくり推進課課長補佐	山崎　太
	道の駅くるめ副駅長（兼）主任	高橋　宏和
【唐津市】	唐津市議会事務局局長	吉田　稔
	唐津市議会事務局議事調査係書記	吉村　寛二
	唐津市商工観光部商工ブランド課からつブランド推進係 （兼）唐津焼振興室唐津焼振興係　係長	安岡　敏朗
	唐津市商工観光部コスメティック産業推進室係長 （兼）一般社団法人ジャパン・コスメティックセンター 総務チーフ	本村　アトム

7 行政視察内容

下関市

（１）下関市議会　歓迎あいさつ《田邨議会事務局長》

（２）柏原経済建設常任委員会副委員長あいさつ

（３）有害鳥獣対策室から調査事項の説明《髙田室長》

「みのりの丘ジビエセンターについて」

① 設置の経緯

・全国的に有害獣（シカ・イノシシ）による農作物被害が拡大しており、下関市においても被害が増加、捕獲後は埋設処理していた。

・平成 20 年 8 月に下関市・長門市の両市長会談において、有害獣肉を有効活用するための加工・販売を行う組織育成、有害獣の肉処理施設の整備が決定し、以後、両市の担当者で肉処理施設の設置に向け協議を行う。

・当時の長門市長が選挙に敗れ、長門市が脱退する。以後、下関市のみで施設整備に向け、先進地視察等を行い、基本計画策定等を行う。

・イノシシ等の処理衛生管理ガイドラインの策定、施設の建設、指定管理者を決め、平成 25 年 4 月に「みのりの丘ジビエセンター」として供用開始した。

② 施設の概要

・建設費用

総事業費 56,148 千円（国費 27,229 千円、市費 28,919 千円）

・荷受室→前処理室→処理室→包装室、プレハブ冷凍庫　延べ床面積 65.42 ㎡

※施設内にホイストクレーンを設置し、有害獣を吊るしたままで処理が可能

③ 指定管理者の業務

指定管理者は、下記の２種類の業務を行う。

・指定管理業務

施設の使用許可、維持管理、施設運営業務

・自主企画業務

捕獲者からと体を買い取り、処理加工の上、一般消費者に販売する。

④ 処理実績

平成 26 年度　546 頭（イノシシ 114 頭、シカ 432 頭）

平成 27 年度　653 頭（イノシシ 122 頭、シカ 531 頭）
平成 28 年度　873 頭（イノシシ 178 頭、シカ 695 頭）

⑤ 買取及び販売価格
シカ・イノシシの狩猟者からの買取価格は　１キロ／200 円
シカロース肉のブロックの販売価格　100 グラム／352 円

⑥ 実績

	仕入量(kg)	販売量(kg)	買取額(円)	販売額(円)
26 年度	9,258	9,166	1,887,829	6,104,718
27 年度	9,160	9,929	2,024,750	8,593,064
28 年度	12,135	11,823	3,680,003	10,906,008

⑦ 下関市ジビエ有効活用モデルの確立
捕獲処理機能＋加工販売機能＋地域ぐるみの有害獣被害軽減対策機能

⑧ 施設設置の効果
・これまで、有害獣は捕獲後埋設処理していたが、施設稼働後は買い取ってもらい対価を得ることができるため、捕獲意欲の向上が図られている。
・農林業従事者が自らわな免許を取得し、捕獲した有害獣を施設に持ち込む方が増加している。
・捕獲頭数は順調に増えており、販売額も順調に増えている。

⑨ 今後の課題について
・野生獣であるため、需要と供給のバランスを取ることが困難である。
※現在、シカ、イノシシともに品不足の状況である。
・現在、施設が市の北部に１カ所のみであるため、第２の施設建設をどうするか。
・販売価格が高いこともあり、一般家庭への消費拡大が容易でない。

<u>久留米市</u>
「道の駅くるめについて」
（１）道の駅くるめ　歓迎あいさつ《山崎課長補佐》

（２）柏原経済建設常任委員会副委員長あいさつ
（３）道の駅くるめの事業説明《山崎課長補佐、高橋副駅長》

道の駅くるめは、国の複合アグリビジネス拠点施設事業により設置した施設で、全体事業費は約 11 億 7 千万（負担割合：国土交通省 4 億 7 千万円、久留米市 7 億円）となる。平成 16 年度より道の駅（複合アグリビジネス拠点施設）に関する協議検討を重ね、基本方針の取りまとめ、平成 17 年度に地権者との事業説明・協議、平成 18 年度に用地買収、平成 19 年度から建築工事を行い、平成 20 年 5 月 31 日オープンした。

道の駅全体の管理運営は、市の外郭団体である一般財団法人みどりの里づくり推進機構へ指定管理者として委託している。来場者は、年間約 1,600 万人で、年間の売上高は約 7 億円にのぼる。

施設の特徴

・農産物直売所　525 ㎡
農業生産都市に相応しい多種多様な農産物や加工品を販売
新鮮・安全・安心な農産物を提供し、地産地消の推進、久留米市の農業情報発信拠点として、「食と農」の交流・理解促進を図っている。

・レストラン　307 ㎡　客席 80 席
地元で採れた農産物、旬の食材を使った郷土料理を提供し、レストラン内はセルフ形式で食事を提供している。常時 20～30 種類のメニューを用意している。

・交流研修室　159 ㎡
地域内及び地域間の交流拠点として活用している。展示会、出荷者向けの栽培講習会を開催している。

・イベント広場　700 ㎡
地域の PR イベントを開催し、生産者と利用者の触れ合える場を提供している。

・情報休憩施設　94 ㎡
リアルタイムの道路交通情報、気象情報、災害発生情報等を提供している。

「久留米まち旅博覧会について」
（１）久留米市議会　歓迎あいさつ《本松議会事務局課長》
（２）柏原経済建設常任委員会副委員長あいさつ
（３）観光・国際課から調査事項の説明《水落課長補佐》

① 久留米まち旅博覧会（以下、まち旅）とは

久留米市に暮らす人々が、普段から慣れ親しんだ地元の歴史や自然、文化などの地域資源を活かし、磨き上げることで、自らが訪れる人をもてなす体験交流型観光プログラム。

② まち旅開始までの主な経緯

・平成 18 年度　久留米市商品化戦略プランの策定（JTB 九州へ業務委託）
・平成 19 年度　久留米市商品化戦略プランワーキングチーム 10 名と、市民 22 名によるプログラム検討ワーキングの実施（JTB 九州へ業務委託）
・平成 20 年度　実行委員会形式でのまち旅を初開催
（事務局：久留米観光コンベンション国際交流協会）
・平成 21 年度～23 年度　実行委員会形式
・平成 24 年度　「NPO 法人久留米ブランド研究会」によるまち旅の開催

③ まち旅の実施者

まち旅の実施者は地元市民であり、自らがプログラムを企画し、自分たちで観光客をおもてなしする。これまで、延べ 650 団体が実施済み。

農業（農家・果樹園・植木）、酒蔵（日本酒・ワイン）、工場（タイヤ・靴・瓦・自動車）、公共施設（自衛隊・競輪場・道の駅・美術館・科学館・資料館・動物園）
名所旧跡（久留米城・寺社）、温泉ホテル、交通機関（電車・バス・タクシー）、病院（総合病院・専門病院）、飲食店（カフェ・うどん・菓子）、工芸家、市民団体

④ プログラムができるまでの流れ

・6 月に企画会議を 2 回開催し、実施者同士で企画内容を磨きあげる。
・8 月に決起集会を開催し、実施者のやる気と結束力を高める。
・10 月から 11 月にかけてプログラムを実施する。
・12 月初旬に報告会を開催し、良かった点・反省点等を情報共有して次回に活かす。

⑤ まち旅の参加者実績

	第1回	第2回	第　3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第　8回	第　9回	第10回	第11回	第12回
開催年	H20 2008 秋	H21 2009 秋	H22 2010 春	H22 2010 秋	H23 2011 春	H23 2011 秋	H24 2012 春	H24 2012 秋	H25 2013 秋	H26 2014 秋	H27 2015 秋	H28 2016 秋

プログラム数		39	51	37	74	71	81	46	80	80	80	80	80
募集人数		1,453	2,423	1,222	2,441	1,412	1,979	857	1,718	1,530	1,654	1,665	1,608
予約者人数		ー	1,799	ー	1,850	1,213	1,734	813	1,610	1,588	1,751	1,798	1,835
予約率		ー	74%	ー	76%	86%	88%	95%	94%	104%	106%	108%	114%
参加者数		1,065	1,714	694	1,791	1,104	1,695	714	1,547	1,567	1,670	1,798	1,732
参加者の市内外比	市内	67%	64.4%	—	58.4%	50.4%	55.8%	64.6%	61%	61%	54.2%	59.6%	59%
	市外	33%	35.6%	—	41.6%	49.6%	44.2%	35.4%	39%	39%	45.8%	40.4%	41%

⑥ まち旅の成果

・交流人口の拡大

これまでの開催による延べ人数は約 17,000 人になり、まち旅をきっかけに久留米市に初めて来た人も数多くいる。

・久留米市のイメージアップ・認知度アップ

久留米市の地域資源・魅力がまち旅という形で具体的に捉えられるようになり、久留米市のイメージアップの向上に貢献している。

・市民による地域の再発見

市民が自主性をもって企画から実施まで行うまち旅は、その中で地元にいながら知りえなかった魅力を発見し、観光客をおもてなししたいと思う心と、久留米市に対する誇りを醸成してきた。

・人材育成とネットワーク化

まち旅を通して、市民の業種の枠を超えた交流が生まれ、活動に広がりがでた。

・定住促進

まち旅の参加者の中には、久留米市の伝統工芸の技に触れ、体験し、久留米市に移住した方もいる。

⑦ 今後の課題

・市外への認知度向上、集客促進

参加者の内、6 割近くを市内参加者が占めているため、今後のプロモーション活動を充実させ、九州域内や関西方面からの誘客に取り組む必要がある。

・実施主体の財政的自立

まち旅の運営にあたり、市の補助金が大半を占めているため、今後の自主財源の確保が必要である。

・まち旅プログラムの旅行商品化

旅行会社や鉄道事業者に対するプロモーション活動を行い、ビジネスとして成り立つ

商品づくり、観光商品化に取り組む必要がある。

⑧ まち旅の今後の方向性

・さらなる人材のネットワーク化

これまで培ってきた人材ネットワークを有効活用し、地域に密着した市民協働による観光振興に取り組む。

・魅力あるまち旅プログラムの造成

実施主体を NPO 法人としたことで、プログラム造成の自由度が向上した。引き続き、あらゆる業種を取り込みながら新しいプログラムを造成していくことで、久留米市の魅力向上に繋げていく。

・より気軽に楽しめる事業展開

「体験」や「食」などを生かして、久留米市に来た観光客が気軽に楽しんでもらえるよう常時楽しめるチケット形式でのサービス提供を行う。

唐津市

（１）唐津市議会　歓迎あいさつ《吉田議会事務局長》

（２）柏原経済建設常任委員会副委員長あいさつ

（３）唐津市から調査事項の説明

「唐津コスメティック構想について」

① ジャパンコスメティックセンター（以下、JCC）の概要

名称　　一般社団法人　ジャパン・コスメティックセンター

代表　　代表理事・会長　アルバン・ロバート・ミュラー

設立　　平成 25 年 11 月 11 日

所在地　〒847－0013　佐賀県唐津市南城内 1－1　大手口センタービル 6F

会員数　187 社（化粧品・美容関連 84 社・素材関連 23 社・その他 80 社）

② JCC の設立経緯

平成 18 年	化粧品の輸入代行・分析企業が唐津市に創業
平成 24 年 1 月	化粧品 OEM 企業が唐津市に工場を設立
6 月	アルバン・ミュラー氏が唐津市を訪問→進出意向を示す
平成 25 年 4 月	フランス・コスメティックバレー協会と唐津市との協力連携協定締結
11 月	JCC 設立
平成 27 年 3 月	コスメティックバレー事務局にて合同商談会
4 月	JCC を一般社団法人へ移行

6 月	BeautyClusterBarcelona(スペイン)との協力連携協定締結
7 月	PoloTechnologicodellaCosmesi(イタリア)との協力連携協定締結
10 月	コスメティックバレー協会（フランス）との協力連携協定締結
平成 28 年 8 月	TaiwanBeautyValley（台湾）との協力連携協定締結
平成 29 年 1 月	ThaiCosmeticCluster（タイ）との協力連携協定締結

③ 活動内容

・国際取引

フランス、イタリア、スペイン、台湾、タイとの提携、ビジネスマッチング

・地域資源の活用

地産素材から化粧品原料のサンプルを製造　120 品目 274 サンプル

・地域素材の供給

例：唐津産レモン、加津島産ツバキ油、玄海町産トウキを用いた化粧品

・商品開発の支援

地産素材を活用した商品の開発

例：川島豆腐の豆乳石鹸、みかん花エキス、白いちごを使用した化粧品

④ コスメティック関係予算

行政（負担金 8,400 万円 負担比率 県：市：玄海町＝8：5：2）

企業（会費 751 万円/173 社）

委託（事業収入 1 億 2 千万円）

⑤ 大学、研究機関とのネットワーク

連携大学：九州大学、九州工業大学、福岡大学、西九州大学、佐賀大学、別府大学
長崎国際大学、佐賀女子短期大学、信州大学、東京工業大学、東京農業大学

研究機関：玄海町薬用植物栽培研究所

⑥ 今後の展開について

・ビジネスマッチングの橋渡し役としての国内外への活動展開

・唐津市内へのコスメティック関連企業の企業誘致

・新たな地域素材の研究と、地元生産者への生産拡大

・地域素材による商品開発のさらなる支援

「唐津焼産業の振興について」

唐津焼は、有田焼と並ぶ九州を体表する焼き物であり、茶道の茶碗を代表するように非常に高価な器である。唐津焼は、厚みや重厚感のある器が多く、豆皿といった日常生活で使う器が少ないため販路も狭くなってきてる。また、現在、市内には約 70 の窯元があるが、作陶家の高齢化が進み、後継者不足等の問題も起きている。

① 唐津焼の現状

・市内の窯元は約 70 カ所あるが、大半が 60 歳以上で後継者が不足している。
・産業戦略がなく、販売額が減少している。
・古唐津に終始しており、新しい作品や取り組みがない。
・経験と勘に頼る製造方法で若手の育成が難しい。

② 唐津焼研究プロジェクトの目的

・唐津焼産業の人材育成
・商品の開発支援
・市場調査、販路調査を実施し、唐津焼産業の振興を図る。

③ 唐津焼研究プロジェクトの概要

・人材育成業務:肥前陶磁器の歴史から製造方法、商品開発までの基礎講座や経営戦略、応用研究を含めた研究講座を実施し、生産者を育成
・研究開発業務：商品開発の相談支援、流通・販路の拡大支援
・調査、分析業務：全国の主要窯業産地の産地振興支援策の調査研究、唐津焼の産業振興策のための分析、提言

④ 29 年度の唐津焼産業振興に向けた取り組み内容

・日本遺産「日本磁器のふるさと肥前」の認定

日本遺産認定ストーリー：16 世紀末頃、九州北部の唐津市北波多の岸岳古窯跡周辺で陶器生産が始まり、朝鮮陶工の技術が九州北部地域へと広がった。現在もなお暮らしの中に磁器が浸透し、歴史を刻み続けていること、磁器に関連した祭りや催しが開催されていることが評価され平成 28 年 4 月に日本遺産として認定された。認定を受けた肥前窯業圏の取組みを活性化させるために「肥前窯業圏活性化推進協議会」を設置した。

肥前窯業圏構成自治体

佐賀県、長崎県、唐津市、武雄市、伊万里市、嬉野市、佐世保市、平戸市、有田町伊佐見町の 2 県、6 市、2 町で構成

肥前窯業圏財源

国（補助金）、佐賀県・長崎県（800 万円）、8 市町（2,400 万円）

・ジャパンエキスポ・パリへの出店
パリのノール・ヴィルパント展示会場で開催される日本文化の祭典「ジャパンエキスポ日本文化パビリオン WABI-SABI」に出店し、海外で評価を受けた作品等の魅力を国内向けに発信し、国内向けのブランド力を高める。
・唐津焼協同組合への支援
唐津焼窯元で構成される組合へ、伝統・技術を活かした唐津焼の価値を高めるための、取扱高増加を中心とした販路開拓の取組みに対して支援を行った。

⑤ 唐津焼のさらなる活性化に向けて（唐津焼研究プロジェクトからの提言内容）
・量から質への消費志向の転換、観光客の増加により、唐津焼は貴重な地域資源
・日本遺産「肥前窯業圏」の認定により、日本文化資源として全国から注目
・「唐津焼美術館」の現実化が進み、観光客への唐津焼を楽しむ玄関口の整備

８ 視察結果について
今回の行政視察の結果、下関市、久留米市及び唐津市が取組み、実行している事項や質疑等の回答を下記にとりまとめてみた。今後、それぞれの取組みを参加した各委員が、各自の印象と同僚委員の印象とを咀嚼し参考にしながら、本市経済建設常任委員会としての調査研究をより一層推進していくものとする。

（１）下関市
みのりの丘ジビエセンターについて
【所感】
・本市の有害獣による被害も下関市と同様に深刻な問題で、野生動物防護柵の設置やわなによる捕獲等では限界があり、解決策がなかなか見出せない状況である。
・下関市での、農林業従事者が自分で有害獣を捕獲し⇒ジビエ有効活用施設に買い取ってもらい対価を得て⇒その対価で更なる被害対策を行い⇒ひいては地域ぐるみで有害獣対策を推進していくといった農業被害防止につながる好循環な活動を目指し、捕獲意欲の向上や被害の減少を図る仕組みづくりは参考になった。
・有害獣対策を大学の獣医学部と連携し、産官学で研究することを検討する必要がある。
・下関市のジビエ有効活用施設の建設にかかる総事業費は約 5,600 万円であり、そのうち約半分は国からの補助金（農林水産省 鳥獣被害防止総合対策事業補助金）を受け、市の負担分は約 2,900 万円であった。本市においても処理施設の設置について検討してはどうか。
・有害獣の肉処理施設として、獣肉をできるだけ新鮮な状態で捌けるジビエカーを導入するという方法もある。1 台 1,700～2,000 万円（ジビエ振興協会とトヨタ自動車で開発）と高価であり、本市の有害獣の捕獲状況を分析した上で導入を検討する必要がある。

・有害獣を飼育し、給食の残飯等を与え脂肪のついたたつの市独自の肉を生産することも検討してはどうか。

（２）久留米市

道の駅くるめについて

【所感】

・施設の運営は、第３セクターの一般社団法人に指定管理料を無料で委託し、施設の維持管理費用を収益の中で賄っている方法は市としても持ち出しがなく良い方法であると感じた。

・集客の工夫は、指定管理者がイベントを年４回計画立案し、市の補助金なしで、近隣の観光施設とタイアップしている。本市の施設についてもイベントの開催方法を確認してみてはどうか。

・施設は防災拠点としての機能も有しており、災害時は敷地内にある下水処理施設のマンホール上に仮設トイレが設置できるようになっており参考になった。

まち旅博覧会について

【所感】

・これからのトレンドになると思われる着地型観光への取り組みとして、名物や観光資源を掘り起し、観光プログラムを現在 80 項目まで増やしていることは、市民の郷土愛にもつながり、市外へも魅力が発信されると考えられ、本市も交流人口の拡大による地域の活性化やブランド化への取り組みが必要であると考える。

・観光資源と結びつかないものでも PR の仕方で変わってくるため、観光に対する専門的な知識を持った方の役割も大きく重要であると考える。

・まち旅のパンフレットの作成は、女性デザイナーの仕事によるもので、女性目線のアイデアが入っている。本市の各パンフレットについても、印刷業者にお任せではなく、デザイナーを交えて作成することにより PR 効果が高まると考えられるため、本市でも取り入れてはどうか。

（３）唐津市

コスメティック構想について

【所感】

・複数の大学や研究機関との連携、地域素材・資源を活用した商品開発、複数の海外クラスターとの連携で、国内外へ活動を展開されている内容は、まさに産官学の理想の形で、本市も取り入れる必要があると考える。

・行政が東京や海外の企業とパイプ役をしているが、最終目的は、雇用の創出・産業の集積

であり、予算執行についても唐津市の産業振興を第一に考えており、広域的な活動から地元を盛り上げるという感覚も必要であると感じた。

唐津焼産業の振興について

【所感】

・行政が作陶家と消費者をつなげる活動をしており、売れる商品の作成をお願いしたり、首都圏への販路開拓、肥前窯業圏2県6市2町で協力し旅行商品として焼き物産地を巡るプランの構築を目指している。本市においても、これらを参考に播磨科学公園都市圏域定住自立圏をさらにPRして、魅力ある地域づくりを目指したい。

・議員提案により、唐津焼の器に注いだ地酒による乾杯を推進する条例を作り、これをきっかけに地場産業の振興につなげるという方法は、非常に重要であると感じた。

・地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを認定し、国内外への魅力発信や地域活性化を図る日本の事業である『日本遺産』の認定は、本市においても自身を持って申請を出せる地域資源があるので、さらに研究したい。